

住の江幼稚園の つみき教育

について

— 学びの基礎を育む つみき教育 —



住の江幼稚園

たくましく生きる力をはぐくむ

～ 住の江幼稚園の特色「学びの基礎を育むつみき教育」 ～

- ◎住の江幼稚園では、「のびのび、いきいき、わくわく。」をキャッチフレーズとして、様々な保育・教育を行っています。
- ◎なぜ「のびのび、いきいき、わくわく。」なのか……。全ては“**子どもの心が動く**”ということが大切と考えているからです。
- ◎幼児期に子どもの心が動く活動の一番は、「遊び」です。
遊びは、楽しさの中から自ら考え工夫し、自己実現していく「学び」の基礎となります。
- ◎住の江幼稚園では、確かな実績に基づいた保育・教育カリキュラムを中心とし、様々な特色のある取り組みを行っています。その中から、子ども達にとって**つみき教育**がどのような位置づけで、どのような意味があるのか、わかり易くご説明いたします。

つみきは子どもにとって、遊びの一つです。子どもの**主体的な活動は遊びである**という考えと共に、**主体的に楽しみながら、効果的に積木を使って思考力や認知力を育てることがつみき教育**です。

つみき教育というと、ただ遊ぶだけと思われる方や、逆に早期的な数学学習と思われる方がおられるかもしれませんが、**幼児期にこそはぐくまれる「やわらか頭」**を育てる適宜教育です。

(※適宜教育：適切な時期に適切な環境ではぐくむことで、時期を逸してからはぐくむよりも、より効果的な教育という意味です。) [つなしのふしぎ]

のびのび、いきいき、わくわく。

遊びの喜び 心が動く もっとやりたい！

「あそびが大切」

生活習慣（挨拶・返事・
姿勢・マナーなど）をは
ぐくむ

態度教育

バランスよく心身を
はぐくむ

体育教育

確かな実績と質の高い
幼稚園教諭による

教育カリキュラム

コミュニケーション力
をはぐくむ

英語教育

感性をはぐくむ
絵画・造形教育

学びの基礎

問題解決能力（知能）をはぐくむ

つみき教育

集中力・イメージ力・転換力・評価力
見通す力・柔軟な思考力・論理力・態度
習慣など

たくましく生きる力

《遊びの大切さ》

①心をはぐくむ

- ★楽しい！という気持ちの素晴らしさを知る。
- ★自分でやってみたい、という意欲をはぐくむ。
- ★友達と協力、協調することを学ぶ。
- ★競い合うこと、同時に譲る優しさや思いやりの気持ちを学びます。



面白い、楽しいという遊びの要素が子どもの力を引き出します、楽しいことはしんどくないのです。どろんこあそびなどの感触あそびは子どもの情緒を安定させます。

②自然な動きと喜びの中ではぐくむ体

- ★遊びを自ら楽しむ中で、自然と行う動き
～走る、跳ねる、止まる、握る、登る、投げる、バランスを取るなど～
訓練して育てるのではなく、遊びの喜びの中から体の基本的な動きを育みます。
- ★小さなケガをしたり、少しヒヤっとする体験をすることで、どういう場所・行動が危ないのか、どの程度の力だと痛いのかという事が身についてきます。



全身を使って遊ぶことが大切です、運動能力の発

③考える力をはぐくむ

★子どもは砂場で何時間でも遊べます。山を作ったかと思えばケーキを作ったりお団子を作ったり、セメントごっこや、宝探し。砂を単に砂として利用する以外の事を考えられるというのは、子ども特有の能力であり、創造性です。私たち大人では、ここまで遊び込むことはきっとできないでしょう。

★「ごっこあそび」は特に重要です。何かになりきるとか、想像した状況で遊ぶ、というのは、「実体が無いものを認識」できているというスゴイ事なのです。このチカラは、勉強する時はもちろん大切な能力になりますし、もっと深く考えますと、「愛」や「信頼」「思いやり」といった本当に実体が無いものを感じたり、意識したりできる力の土台となるチカラなのです！

★問題解決能力をはぐくむ（知能）

遊びの中で、工夫したり、自ら考えたりする中で、問題解決の能力を学びます。



《遊びから学びへ》 問題解決能力（知能）をはぐくむ

幼児期に育てるものとして、楽しさの中で遊ぶことから、学びへの意欲・態度を育てることが大切です。ここでの「学び」とは、点数化して目に見えるお勉強ではなく、問題解決が自分でできる力（知能）のことです。

知能とは？

知的活動の総称。認知、記憶、試行、判断推理などのさまざまな能力を包括した概念。「個人が目的にかなった行動をし、合理的に思考し、**自分を取り巻く環境からの働きかけに対して効果的に対処していく総合的な能力**」

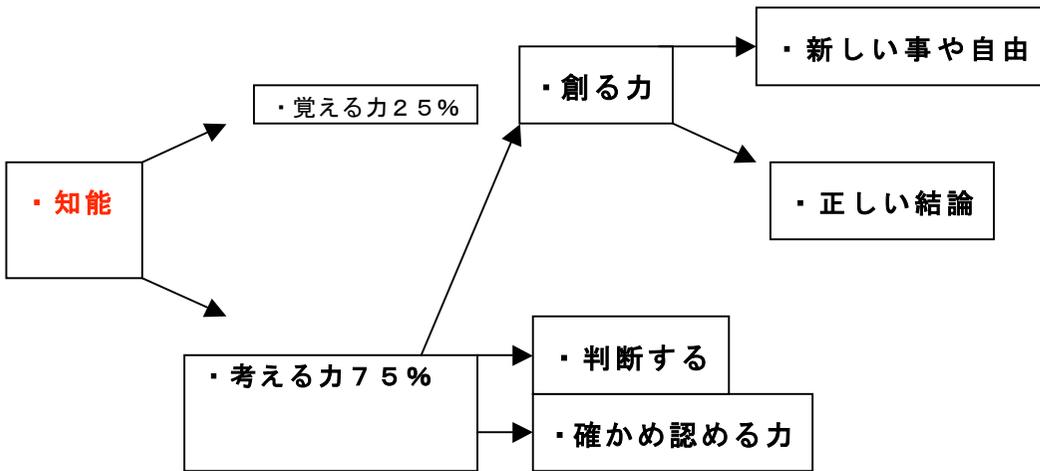
つまりは、
『たくましく生きる力』
なのです

《まちがえないで！》

知能というと、知能指数などという言葉から、勉強ができるという部分だけで受け止められがちですが、点数で評価される勉強ができるということではなく、**思考力がある**ということです。これからの時代を生き抜く子ども達に、自ら考え工夫し、問題を解決する思考力を身につけてあげたいものです。

頭脳＝知能 知能＝覚える力25%・考える力75% で構成されています。

一般にはまだ、覚える力である記憶力だけを伸ばすことが重要視されていますが、幼児期には全体的な知能教育が必要です



《住の江幼稚園のつみき教育》

遊びの中から課題に対して柔軟かつ論理的に解決することができる、子ども達の「考える力（思考力）」をはぐくむことを目的としています。

考える力（思考力）は、学習する力の基礎となるものであり、将来の学力や社会生活を営んでいく力を高めるための容器（うつわ）のようなものです。

積木という具体物を使い、子ども達自身が**楽しいという感情と共に指導すること**で、子ども自身のもつ**“やってみよう、挑戦しようという姿勢”**、“**自分で伸びようとする力**”を育てます。

つみき教育の理論

心理学者ギルフォード博士のSIモデルといわれる知能構造理論をベースに、図形、記号（文字や数字）、概念（言葉や文章）の3つの領域の、認知・記憶・拡散・集中・評価の五つのはたらきを刺激します。

「できた・できない」という結果を見るのではなく、自分で考え、やり方を見つける過程に重点を置き、思考力を育てます。

あそびで育つこと、つみきで育つこと

あそびで育つこと と つみきで育つこと

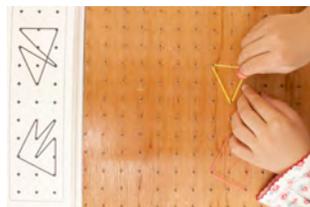
あそびでは育てにくい部分 と つみきでは育てにくい部分

どっちもあるから住の江幼稚園では両方のバランスを常に考えています。

《積み木教材例》



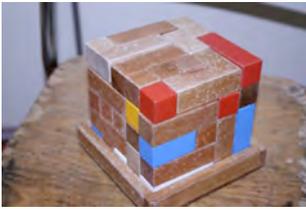
様々な形、大きさの積木が、子ども達のイメージを膨らませます。



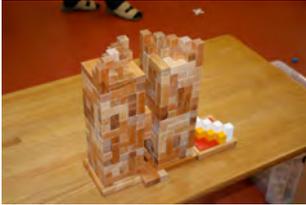
色を量としてイメージしたり、ゴムを考えて形にしていくこともつみき教育の中で展開されます。



多彩な形状の積木をパズルのように組上げることで、楽しみながら思考力をはぐくみます。



平面・立体・色・形、無限に広がる可能性があるから、無限の答えがあります。



具体物で立体を形成することで、表面から見えていない部分の構造を認識する力が身に付きます。

《授業のようす》（写真は課外教室 つみきランドの様子です）

- 年少児：
子どもの心が満足するたっぷりの積木の中で、両手を使いながら遊ぶことから始めます。
興味関心という**子どもの心が動く**ので、年少児でも集中して取り組むことができます。



- 年中児：
先生のお話を**しっかりと聞く**ことができるようになり、課題に取り組む姿勢が積極的になります。
自分で考えたことが形になったという喜びが、更なる興味に発展し、自然と問題解決の**探究心**につながります。



● 年長児：

課題の内容を**すぐに理解**することができるようになり、自分なりに**様々な答え**を見つけようとする姿が見られます。今までの経験をもとに、具体物を動かすと同時に頭にイメージが浮かぶので、**見通しを立てて**取り組んでいます。



集中力の持続：子どもの心が動く（やってみたい、楽しい、もっとしたい）ことから、
どの子も真剣な表情で、時間内たっぷり集中することが身に付きます。



「せんせい、できました。」
自分から工夫してできたことを認められる喜びは、自尊の心に根付いた 自信を育てます。



年少児でもしっかりと自分から言う力を身につけていきます。

《積木教育を通じて育つもの》

① 集中力の持続

② イメージ力（頭の中で思い描く力）

③ 転換力（色々な角度からものを捉える力）



④ 評価力（正しいことを判断する力）

⑤ 見通す力（行動の予測を立てられる力）

⑥ 柔軟な思考力（様々な答えの導き方を養う）

⑦ 論理力（順序よく考えたことを整理し、理解する力）

⑧ 学ぶ態度・習慣（人の話を聞く、聞いたことを自分なりに考え実行する）

「き・み・や・い・わ・や」を育てる

き：聞く力、 み：見る力、 や：やる力、 い：言う力、 わ：笑う力、 や：優しい心



つみき教育を通じて育つものについて、説明しましたが、これら全てのことが一足飛びに身につくものではありません。年齢やクラスに応じた対応をしてこそ、総合的な能力が育まれます。

住の江幼稚園では、経験豊富な専門講師により、つみき教育に取り組んでいます。

正課（通常保育カリキュラム）では、つみき教育の基礎として、年齢に応じ、全ての子ども達に無理のないような内容となっています。

つみき教育への理解を深めて頂くとともに、より総合的な力をはぐくむことができるように、課外教室でのつみき教育を実施しておりますので、ご参加をおすすめいたします。

《つみき正課の年間目標》

（年少）：①つみきの楽しさを知る

②「できました」など、大きな声で言える。

・自分の言葉で表現する力、伝える力、言う力。

③両手でつみきをさわることができる。

・左右の手のバランス、左右の脳への刺激、積極的に関わる。

（年中）：①先生や講師のお話を集中して聞く。

②大きな声で意思表示することができる。

③むずかしい事やはじめての事でもあきらめずに頑張る。

（年長）：小学校へ入学にあたって、学びの態度姿勢づくり。

①先生や他人の話を1回で聞き取り、理解できる。

②自力から積極的に物事に取り組む。

③自分の意志を他人に言葉でしっかりと伝えられる。

課外算数：教え込まない授業。小学校算数の先取りではありません。

「かず遊び」：かずと良い出会いをすることが目的です。

「小学算数」：かずの世界に対して広域的視野を持たせることが目的です。

《住の江幼稚園の願い》

今、子ども達を取り巻く環境は大きく変化しています。「学級崩壊」や「小1プロブレム」といった身近な問題も年々難しい問題になってきています。また、学力低下や数学的・科学的な能力が低下していることも、社会問題になっています。

思春期になれば、いじめの問題も深刻に心配される時代となり、若い世代のことを「ガラスの心」と呼ばれるような現代です。このような時に、困難を乗り越えていく強い心を持ってほしい、解決策は一つじゃないって考えられる子に育ててほしい、と願うのは皆同じではないでしょうか。

子ども達の遠い将来、大人になったときには、ますます国際化が進み、言われたことをするだけの人材ではなく、自ら考え行動する人材が求められます。難しい課題に直面したとき、多方面から考えたり、発想の転換をしたり、粘り強くあきらめずに考えられなければ乗り越えていけません。

子ども達の足腰を鍛えるように、「やわらか頭」をはぐくみ、本当の意味での『たくましく生きる力』を育てたい、それが住の江幼稚園の願いです。

コラム

つなしのふしぎ

“つなし”、つまり、ひとつ、ふたつ、みっつ……このつ、とうお、で、1～9までは、「つ」が付く、10からは、「つ」が付かないので、“つなし”です。

「味覚は、つなしまで」と、言われています。

今、「食育」が、話題になっておりますが、10才までにその人の味覚が決まるというわけで、巷で言う「食は三代」とか言われるのも、優れた味覚を養うには三代かかる という意味でこう伝えられています。

絶対音感

絶対音階とか絶対音感といわれているものです。別になくても不自由しないといいますが、聴覚も6才ごろまでに完成するという話です。聴覚に関連しては今、話題になっている英語もヒアリングに関しては この時期に養われると言われてしています。

数学的センスも、9才まで

今、本園で行っている積木も、課外は主に9才まで行っています。だいたいそのころまでに、図形や数のセンスが身に付きやすいということです。

[7才までは夢の中]と言われますが、この時期は夢の様な感覚の中で、いろいろな感覚が 刷り込まれていく大切な時期なのだと思います。頭のやわらかい時期に、きちんと「鉄は熱いうちに・・」と、いうことなのでしょう。そういう意味で我々は、人間の基礎になる大切な時期を担っている事を認識して、保育を行わねばなりません。

学園長がにっしんのつみきとかかわったきっかけ

私が、今現在幼稚園に導入している“つみき”と出会ったのは、知り合いの幼稚園に遊びに行ったときでした。衣装ケースの中のつみきをのぞいて、「何これ？」「どう使うの？」と、聞いたのが始まりで、温泉に行ったら宿の売店に売っている“つみき”のパズルをほしがる子どものように、そして、たぶんゲームのテトリスみたい……ぐらいに思っていました。ただ“つみき”等の教材は、きらいではなかったので「これどこで売ってるの？」と聞いていました。

今思えば、“つみき”という単純なものでありながら、とてもよく考えられており、大企業へのノウハウの流出防止の為、簡単に導入させてくれないシステムだと伺ったのは後のことでした。

もともとつみきに興味が有りましたので 幼稚園には木のおもちゃを、多く取り入れておりますが、大半はドイツや北欧の物が多いのです。主任が「園長先生すごい」と言うから「体重かい？」と聞いたら、ドイツに研修に行ったら、むこうの幼稚園のおもちゃのほとんどが、うちの幼稚園にあるというのです。「うちのまねをしたな！！」と冗談を言っていたのですが・・このように以前からつみきのような教材に常に興味を持っていたのです。

フレーベルの恩物というつみきがあります。幼児教育を学んだ事の有る人は、知っていると思いますが、つみきを用いて具体的にどの様な指導が有るのか、ただ与えるだけ

でなく、こちらからの働きかけにはどのような手法があるのかということに関心があったことも、このつみきの導入に至った経過なのです。そして、当初つみき指導の技術を学ぼうと始めたのですが、どうやらこれはつみきを使っての子どもとのかかわり方、こどもの発達の見方、つきつめれば児童心理学に近いものだと思います。

ある一定以上では甘やかさない、指示しすぎない、集中させる、という部分において指導のスキル(技術)というより教育的な思想を思わされます。その昔、年長児にカラスゲームというボードゲームをさせてみました、私は、幼稚園児には早いのではないか、テーブルで4人でゲームをするのは無理ではないかと思っていましたが、子どもたちはきちんとルールを守ってゲームをしていたのです。つみきでも30分も持続しないと思っていた子が、黙々と集中している姿を見ていると、子どものすごさを再認識し、子どもは出来ないと初めから思っはいけない事を反省させられたのです。

今、子どもの学力低下、算数能力の低下が問題になり、「小1プロブレム」や「学級崩壊」と言う言葉を耳にするようになって長くなります。この時期の早期教育ではない初期教育の正しいあり方が求められてきたのかもしれませんが。つみきを導入して再確認したことは、ペーパーワークではない具体物の操作教材を用いて、子どもの主体的な活動を通して意欲や積極性を引き出し、「考える力」「集中力」「人の話を聞く力」を育てることができる事でした。

「生きる力を育む」という目標にも上記の力を身に付けることにより達成出来るものと考えております。 つみきの操作上手にすることが目的ではなく、その活動を通して、「図形センス」「数的センス」「立体感覚」を育て、勤や感性を磨きたいと考えています。そうすることが、最終的な目標である「生きる力」を育む一助になると思うのです。



[ニキーチンの積み木]



[フレーベルの恩物]



[住の江幼稚園の積み木教材]

[住の江幼稚園では にっしん の教育理論と積み木を教材にしています。]



[カラスのボードゲームの様子]

たくましく生きる力

学力は生きる力、では、生きる力とは・・・

- ・ 知識や技能を身につけ活用する力
- ・ 学ぶことへのやる気や意欲
- ・ 自分で考える力
- ・ 自分で判断する力
- ・ 自分を表現する力
- ・ 問題を解決し自分で道を切り開いていく力

を総合した力のことではないでしょうか。

反復練習や作業の訓練や特訓では思考力は培えません。

反復練習や作業の訓練や特訓では、将来「言われたことしかやれない」「応用が利

かない」「工夫や考えのない仕事ぶり」といったことが出てきます。

思考力のついた子は、「その作業に何の目的や意味があるのかを考え」「常に創意工夫を凝らし」「他の人が思いつかない発想が出来」「主体的に考えないと気がすまない」という特性を持った子に育ちます。